

モンゴル私観

陽光新聞社・顧問
塩澤宏宣

大相撲(九州場所)を見ながらの雑感から始めたいと思います。相撲といえば日本の国技といわれてきました。もう大分前になりますが、ハワイから来た高見山や曙、小錦、武蔵丸などのアメリカ人が横綱や大関になり「国技」ではなくなった時期がありました。

しばらくして千代の富士、若・貴兄弟の活躍で「国技」が復活しました。それが現在では横綱を白鵬、日馬富士、鶴竜のモンゴル人が独占しています。モンゴル人力士は幕内で10人いるとのこと。

まさに「蒙古襲来」を思い出さ

せませす。外国人力士にはそのほかにもロシア、エジプト、ジョージア、ブルガリア、エストニアなどの欧州人も加わり、国際競技化の時代です。

蒙古といえば「元寇」を思い出します。元・高麗連合軍が2度にわたって日本に侵入した事件、鎌倉時代中期の「文永の役(1274)」と「弘安の役(1281)」です。ヨーロッパにまで及んだ元の征服欲が東に及び、日本に「朝貢」するよう迫り、日本がそれを拒否したことが「元寇」の原因といわれます。中学か高校の歴史で学んで蒙古(モンゴル)はけしからん…と憤った思い出があります。

この憤りを消したのは甥が生まれたときでした。甥のお尻にある「蒙古斑^{ほん}」を見たときでした。かわいいお尻にうっすらと浮かんだ青アザを見て、「日本人のルーツは蒙古にある」と教えられました。それ以来、私の意中では蒙古が俄然親しいものになりました。厳密に言えば「元・蒙古・モンゴル」は一致しないのかもしれませんが…以下はあちこちからの寄せ集め文をもとに「私観」を書いてみます。

「史記」を誕生させた「匈奴とは」

紀元前318年、モンゴル高原に出現した騎馬民族がやがて帝国をつくり南下して漢民族の地を侵す。この帝国を漢は「匈奴」と名づけた。中国を再統一した漢帝国はできたばかり。匈奴の進出に対して、漢の高祖(劉邦)はみずから大軍を率いて大同で戦ったが、匈奴の大群に包囲された。命がけで脱出した高祖はその後、娘を単于(王)に贈って単于の妻とし、さらに年々莫大な貢物を送り、単于をもって兄として仕えるという屈辱的な関係をもった。

史記の作者は司馬遷である。司馬遷は匈奴との戦いに敗れた漢の将軍・李陵をただ一人弁護したことにより、皇帝の怒りを買って「宮刑」に処せられた。この上ない恥辱の「宮刑」に耐えて生き残ったのは史記を完成させるためであった。司馬遷は自序のなかで次のように述懐している。

「かつて孔子は旅の危難を乗り越えて『春秋』を編み、屈原は故国を追放され『離騷』を著し、左丘明は失明して『国語』を残した。このような人はみな、心に鬱積した感情の捌け口を見出せぬとき、往時を語って未来に期待を託したのである」

と。これは同時に司馬遷の想いでもあった。

旧書に見る「匈奴」

匈奴とはどういう人種であったのか。モンゴル人であることは事実であるが、体型についてはスキタイのような白人に似、あるいは古代トルコ人だったのではないかと諸説ある。

史記の「匈奴列伝」には、「家畜にしたがって移動し、鳥や獣を射猟して生業とする。君主以下、みな畜肉を食料とし、その皮革を衣服とし、皮衣を着る」とある。また漢書の「匈奴伝」には、「年々匈奴に絮(まわた)、絹、酒食を漢から呈上した」とあり、唐のころからは絹布のモンゴル服を好んで着るようになったという。後漢書の「烏桓伝」には、「かれら(匈奴)は水草を追って放牧し、定住の地を持た

ない。穹廬(きゅうろ：フェルト製の天幕。中国人の言う包)を持って家とし、肉を食い、乳酪を飲み」とある。「史記」にも「漢書」にも「匈奴には姓と字がない」と書いてあるが、モンゴル人には今も姓はないそうだ。

中国の影響を受けやすい近隣国で、今も伝統を守る民族は頼もしい。それにしても「匈奴」とは？ 匈匈…「騒がしく叫ぶ」という意味があり、きっと馬に乗って大声で叫ぶ奴(どれい)ということが理由だとも言われるらしいが、漢民族が自己中心的、上から目線で異民族を呼んだ証拠である。北狄、南蛮、東夷、西戎やそこに住む民族、たとえば鮮卑、羯、氐、羌などなど。

英雄「チンギス・カン」

匈奴は騎馬民族である。人間が馬に乗るという技術は、紀元前6世紀ごろ黒海沿岸の草原で活躍していたスキタイで生まれたらしい。その騎馬技術が、中央アジアの草原で牧畜をしている諸民族に影響を与え、やがて東進してモンゴル高原に溶け込んだ。世界を席卷したモンゴルの騎馬軍団はそうして生まれた。かつてユーラシア大陸を縦横無尽に暴れまわったチンギス・カンの一族は、今もモンゴル人が誇る英雄だ。

現在のモンゴルについて

国土は日本の4～5倍、人口は約280万人。世界でも2番目に社会主義国(モンゴル人民共和国・1924)になったが、ソ連崩壊後の1992年に民主化に移行した。国の東・南・西は中国、北はロシアというように周囲を大国と接する草原の国である。首都はウランバートル(赤い英雄市)。憲法の条文に「極端な愛国主義と盲目的な民族主義を排す」とある。極端な愛国主義や盲目的民族主義は人類のためにならないし、むしろ有害である。こうした条

文を憲法で堂々とうたう国は、世界でも類がないという。チンギス・カンの置き土産かもしれない。

思い返せば、昭和期の日本は帝国主義的発想で、「満蒙」を唱えて大モンゴル国家の建設を提唱した。幸いにもその夢は費え去ったが、このモンゴル憲法の条文は、世界の国々が一考してもいいのではないか。

秦の始皇帝とチンギス・カン

民族にとって、その民族の英雄は民族結束の象徴になる。毛沢東は、秦の始皇帝を称揚している。分裂していた漢民族世界を統一したという歴史を持っている。なかでも「文字の統一」は最大の成果であろう。話し言葉が通じない時代にあっても意思が通じ合えるということは民族統一の最大のパワーである。

モンゴルが社会主義国であった折、チンギス・カンの名を出すことはタブーであった。彼の名を開放するとモンゴル人の精神が高揚して民族主義が暴発する危険を感じていたソ連は、チンギス・カンの名を押さえ込んだという。

砂漠と牧草地で生活する遊牧民にとって、国家の基本条件としての領土に対する観念がない。モンゴルという遊牧民の国家といえば「同胞」だけであった。かつて元が明と争い敗北(1368)した際、元は領土を捨ててサッサと北へ退散したことがいい例だ。領土的野心のある国は、そのような野心は毛頭ないサッパリした遊牧民を見習ってはどうか。

私は前号で「タミル人と日本人」で、日本人のルーツを書きました。今回は「モンゴル私観」でも引き続き「日本人のルーツ」を書いたつもりです。日本人の幼児にある「蒙古斑^{ほんこく}」以外に、モンゴル語の言葉の構造も日本語に類似しているそうです。それらを考えるといっそう親しみがもてるようですが、皆さんはいかがお考えでしょうか。